

1 これまでの研究の経緯と生徒の実態

本校は、学校教育目標「心豊かで たくましい生徒」の具現に向けて、これまでの5年間は「学びの共同体」を基盤に、教職員一丸となって努力してきた。かつての本校生徒は、学習習慣が定着し、落ち着いた雰囲気の中で授業を受けることができ、学習課題に対し、誠実に取り組み、追究しようとする生徒が多かった。しかし、反応する、表現することに弱さがあり、挙手はあるものの、一部の生徒の発言で授業が進み、多くの生徒は傍観者となっていた。また、全国学力学習状況調査においては、正答率が徐々に下がり始めており(R2～4年度)、質問紙での自己肯定感の評価についても全国平均を割る状態が続いていた(R1～3年度)。そのような危機感から授業改革の必要性を強く感じ、本校では学習指導要領で目指す「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、「誰一人置いていかない 小集団での学び合い」を学校経営の重点の一つに据え、「学びの共同体」を基盤に授業改革に取り組んできた。また、学び続ける集団づくりがすべての基盤であると自覚し、「誰一人あきらめない学級づくり・仲間づくり」にも取り組んできた。生徒一人一人に授業が楽しい、仲間と考え合うことが楽しいと思えるようにし、自分の学びに自信を付けていった結果、全国学力学習状況調査の質問紙調査において、「自分にはよいところがあると思いますか？」の問いに対して、約8割の生徒が「そう思う」と回答した。本校の課題であった「自己肯定感の低さ」を克服しつつある。授業改革を機とした包括的な取組により、学校全体の雰囲気も変わってきた。

しかし、昨年度、小集団交流における生徒アンケートと先生方へのアンケートで、「誰とでも同じように小集団交流ができる」「あまり発言しない仲間がいたとき、『〇〇さんはどう思う?』などと話を振ることができる」の項目が顕著に低くなった。生徒の意見としては、「多様な考えが知れる良さ」「意見を認めてもらえる良さ」を感じている一方で、「仲間の意見に頼りきりで自分から考えない姿」がある、「小集団の人間関係ができていないとうまく話し合えない」と感じる生徒が多いことが分かった。また、先生方の意識として『「学びの共同体」の指導方法の正しい理解ができていない』『「小集団の必然性がない交流になっていたり、小集団に頼り過ぎていたり、形だけの小集団交流になっている」という意見が出てきた。生徒の意見や小集団学習での生徒の様子は「主体的に探究する姿」ではなくなっていることを感じた。また、教職員の私たちも、「学びの共同体」の理念を理解する研修の時間が少なく、研推から言われたことをやってみるものの、小集団学習をうまく活用できず、停滞する姿があった。それは生徒に「主体的に探究する姿」を伝えるのにふさわしい姿なのかと問われるようなものであった。

そこで、主任会と研推で拡大研推を行い、今感じている子どもたちの様子や自身の授業での困

り感を共有し、来年度以降の研究の方向性を考えた。その中で、研究を研推からのトップダウンで行うのではなく、教職員ひとりひとりが研究への必然性を感じ、研究を進める「しなやかに探求し合う職員集団」を目指し、R7年度の1～3月を「研究0ステージ」とし、小集団交流についての研究を行った。教職員を同じ研究課題の小集団に分け、それぞれの研究チームで研究課題について授業研究会を行い、その成果や課題を研究ルームに集めた。

「0ステージ」終了後、同じアンケートを教職員に行うと、どの項目も意識の変容がみられた。小集団交流をなんとなく行っているときには、交流しているように見えていた生徒の姿も、よく見ると停滞していたり、理解できていないことが分かったりしたことや、目的を持って小集団を行うことで、より学びが深まることを感じている先生もいた。

2 令和8年度の研究主題(案)

本校に与えられた使命、今日的な課題やこれまでの研究の経緯と生徒の実態から、令和8年度の研究主題を下記のように設定する。

生徒が主体的に探求し続ける授業の創造

3 研究主題設定の理由（研究構想図 別紙）

研究主題設定に向けて、まず、東安中の教育目標「自主連帯」、教育目標「心豊かでたくましい生徒」と現在の東安中の生徒と照らし合わせ、目指す生徒の姿を「仲間と共によりよい生き方を自ら探究し続ける生徒」とした。

近年、急速な技術の発展や経済状況の変化により、不安定さが増している。このような社会においては、自ら考え、適切に判断し、主体的に選択する力が求められる。また、ひとりひとりが自立した存在として行動するとともに、多様な人々と協力しながら支え合う「共生社会」の実現も重要である。そのためには、生徒が自ら探究し行動する力と、他者を尊重し協働する姿勢を身に着けることが必要であり、そのような生徒を育成することを目標とした。

目指す生徒の姿に到達させるために、研推では「仲間とともに主体的に学習に取り組む」「問題解決までに粘り強く探求する」授業を実践することが必要だと考えた。小集団交流だけではなく、ペア交流やスクランブルなど、生徒とともに今日の課題に即した「協同的な学び」のスタイルを考え、探求し、自己や全体の成長を振り返る「東安スタイル」の授業を実践することで、生徒が主体的に探求し続けることができるようになると思った。

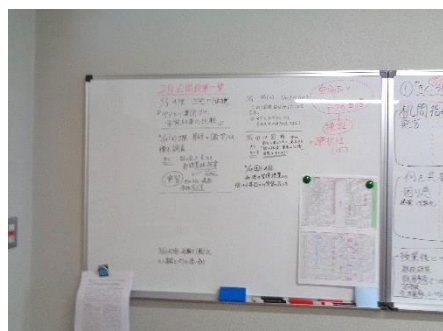
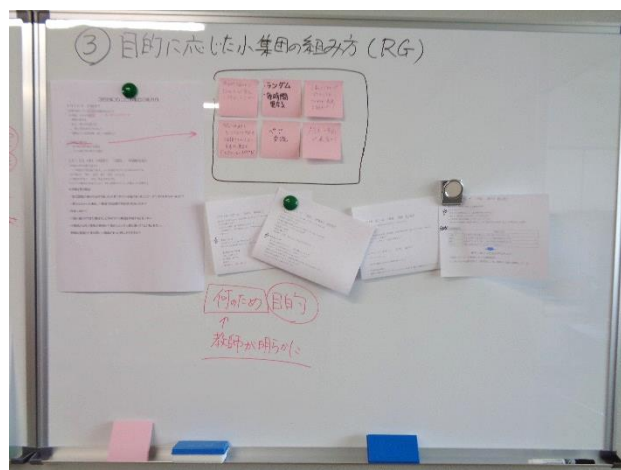
4 授業研究会について

今年度も授業で勝負できる東安中学校を目指し、生徒に力を付けるために、私たちは自分た

ちのPDCAを回し続けなければならない。また、全校研究会では、授業者は計画的に研究内容を明確にした授業公開の準備をしたい。今年度はブロック研究会を行わず、別紙の研究組織図にもあるように、3～4人の研究小集団をつくり、その中で研究会を行っていく。年3回小集団を組みなおし、同じ研究テーマの小集団で授業を参観し、協議、検討することで、「しなやかに探究し合う職員集団」を具現化していく。

全校研究会	第1回（5月上旬）	第2回（10月下旬）	第3回（1月下旬）

- ・全校研究会に向けた流れは、【教科部会→研推審議→教科部会→（指導者の先生からの事前指導→教科部会）→事前研→研究授業】
- ・学びの共同体では指導案自体がなく、「授業デザイン」のみとなる。しかし本校では、教師自身も学ぶことを目的として、指導案を作成する。「ねらい→第1課題→第2課題→評価」の流れを1案もち、それ以外の展開例を、補助発問と共にもち。この積み上げが、やがて「授業デザイン」だけで授業ができる教師を創っていくと考える。
- ・小集団での授業交流では授業デザイン案を作成したり、ねらいと出口の姿を伝えたりする程度とする。その代わり、研究テーマに沿って工夫したことを参観者に伝え、その視点で授業を参観し、研究を行う。
- ・小集団で出てきた意見は適宜、付箋に貼って、研究ルームに掲示していく。研究ルームは授業のヒントの場となるので、小集団のキャプテンは研究ルームを活用し、研究の活性化に努める。



昨年度 0ステージの研究ルームの
ホワイトボードの様子